

アクションリサーチ・ イン・アクション

共同当事者・時間・データ

矢守克也



現場に要請され、
問題解決に資する社会実践として、
アクションリサーチはどうあるべきか。

三つのキーワード——「共同当事者」「時間」「データ」——を軸に、
洗練・発展・深化するアクションリサーチのロジックと実践を一望。

アクションリサーチ・ イン・アクション

共同当事者・時間・データ

矢守克也

新曜社

まえがき

「ポスト阪神・淡路」から「プレ南海トラフ」へ

人間や社会について書かれた本について読むときは、それがいつ書かれたのかに注意を払うことが必要だと言われる。いつ書かれたかがその本の内容を規定する最も強力なコンテキストの一つだからだ。

本書の姉妹編にあたる前著『アクションリサーチ：実践する人間科学』（新曜社）を刊行したのは2010年6月のことだった。東日本大震災が発生する前年である。あらためて繙くと、その内容は「ポスト阪神・淡路」の色彩を濃厚に帯びている。つまり、阪神・淡路大震災（1995年）の後の社会をどう生きるか、いかに構想するかをめぐるアクションリサーチが前著の主題となっている。

それに対して、本書を構成する論考群はいずれも、東日本大震災が発生した2011年以降に書いたものである。よって、「ポスト東日本」であることはもちろん、「プレ南海トラフ」の性質をもっている。超高齢化に加えて過密と過疎の不均衡が限界点を越えた社会の下で、南海トラフ巨大地震・津波（詳しくは、第2章などを参照）、あるいは、首都直下型地震の発生を迎えてしまうことになりそうな日本社会におけるアクションリサーチが、本書の主たる内容となっている。これが、現実的、実践的なコンテキストにおける本書のポジションである。

ただし、本書は、防災実践の書ではない。アクションリサーチの金看板でもある理論と実践の高次元での融合を志向し、また、第1章の掉尾で掲げる理念"Think practically, act theoretically"（実践的に思考し、理論的に行動せよ）の実現をめざした理論探究の書でもある。ここで、「ポスト東日本」というコンテキストは、たとえば、津波防災をテーマとする研究が増えたといった単純明快な変化だけでなく、大学における研究活動全般にも有形無形の影響を及ぼしていることが大切である。最も重要な変化が、基礎的で理論的な研究よりも、「（今すぐ）役立つ研究」へと研究者を追いたてる圧力の増大である。本書は、この圧力に対する筆者なりのささやかなレジスタンスで

もある。

たしかに、本書の主題は、アクションリサーチ（実践的な研究＝研究的な実践）である。だから、むしろ本書は理論的な思索と遠く隔たっているように見えるかもしれない。しかし、本書でなそうとしたことは、単なるアクションリサーチ（その報告）ではない。アクションリサーチを現実に実践すると同時に、アクションリサーチを行うことの意義と限界を理論的に見極める仕事である。本書では、この課題について、前著よりも精緻な突き詰めの作業を展開することができた。評価はむろん読者に委ねるほかないが、筆者としてはそのように考えている。

三つのキーワード

以上の意味での理論的探究のために据えたキーワードが、本書のサブタイトルとして掲げた三つの用語、すなわち、「共同当事者」「時間」「データ」である。本書は、これら三つのキーワードを各部の主題とした三部構成となっている。

第Ⅰ部の主題は、「共同当事者」である。前著の序章で、筆者はアクションリサーチの二大基本特性を提示した。その一つが、目標状態を共有する研究対象者と研究者（双方含めて当事者）による共同実践な研究、という特性であった。本書では、ここで言われている当事者を「共同当事者」として、より明確に位置づけ直した上で、研究対象者と研究者から成る共同当事者が共になす共同実践のことをアクションリサーチと定義している。しかし、それにしても、研究対象者はあくまでも研究対象であって、彼らが研究者と共同するとはどういうことなのか、またそのようなことが可能なのか。そして、可能だとしても、そもそも共同する必要などあるのか。多くの重要な疑問が生じる。第Ⅰ部では、これら、アクションリサーチの屋台骨に関わる重要な論点について考察する。

第Ⅱ部の主題は、「時間」である。こちらは、アクションリサーチについて前著で提示したもう一つの基本特性に関わる。それは、目標とする社会的状態の実現へ向けた変化を志向した広義の工学的・価値懐胎的な研究、という特性であった。アクションリサーチは、目標状態の実現へ向けたベターメントを図るための変化を実際に社会にもたらしつつ、それと同時に社会に関する知を獲得する活動である。ここには、よき未来という展望的準拠点と、

それに対置される形で置かれた問題含みの現在、さらにはそのような現在へと至らしめた過去からの経緯 ― このような一連の時間的な推移が仮定されている。ここで特に重要なことは、アクションリサーチが変化を企てるという性質をもっている点である。ここには、客観的な時間の軸線上で事態の推移を静観する態度（たとえば、時系列で対象を観察すること）とは異なる、時間に対する主体的な関与が認められる。両者を区別して扱うために、第Ⅱ部では、客観的な「時間」に対して、人間の主体的な構えとともにある〈時間〉という概念を導入して、アクションリサーチにおける〈時間〉について考える。

第Ⅲ部の主題は、「データ」である。ここには、二つのモチーフがある。一つは、アクションリサーチ（人間科学）におけるデータの機能を何に求めるのかというモチーフである。人間科学と対置される自然科学におけるデータの機能ははっきりしている。それは、一にかかって「実証」である。つまり、仮説的命題と客観的事実との一致を確認するための資料となること、これがデータに求められる機能である。それに対して、本書では、「データ・イン・アクション」という概念を提示した上で、アクションリサーチでは、データの働きが別のところにあることを主張する。もう一つのモチーフは、量的な研究アプローチ（データ）と質的なアプローチ（データ）との関係である。「アクションリサーチ＝質的データ、オーソドックスな実証的心理学＝量的データ」といったトンデモない誤解は論外としても、これら二つのタイプのデータがそれぞれ、アクションリサーチにおいてどのような特徴的な役割を果たすのか、両者の生産的な相補関係があるとすればそれはいかなる意味においてか。第Ⅲ部ではこういったことについて論じる。

前著からの継承・発展

上述したように、本書は、姉妹編となる前著の成果と課題を踏まえた続編である。前著を手にとりてくださった読者のために、また、本書のハイライトを知っていただくためにも、今回どこをどのように継承・発展させようとしたのかについて、三つのキーワードごとに簡単に触れておきたい。

まず、第Ⅰ部の「共同当事者」については、重要なポイントが二つある。第一に、筆者は、前著で、アクションリサーチの理論的基盤として社会構成主義を提示した。社会的構成とは、私たちに対して意味ある世界を現出させ

る作用のことである。重要なことは、「研究者自身（研究者の認識や行為）も、この世界の社会的構成への内在という原理原則から免れえない」（前著序章）ことである。前著では、この点について主に理論的な検討を実施したが、本書では一歩進めて、この原理原則が共同当事者としての研究者に実際にどのように影響するのかについて論じた。本書で、アクションリサーチでは、「観察対象となっている社会実践を単に『見る』だけでなく、『見る』ための研究活動という実践がすでにその内部に入り込んでいる社会実践を、それでもなお研究という実践を通して自分たちは見ている——そのような構造をよく見なければならぬ」（「見る」ことを見る）というフレーズを繰り返して使って関連事例の検証作業を行なっているのは、このためである。

「共同当事者」については、第二に、「永続する運動としてのアクションリサーチ」（第1章）という観点も重要である。本書では、阪神・淡路大震災の経験を語り継ごうとする語り部グループ（主に、第5章）、および、防災ゲーム「クロスロード」（主に、第1章、第7章）をめぐる筆者自身のアクションリサーチを通して、この点について論じている。この両者は、前著でも多くのスペースを割いて取り上げた（前者は前著第4～5章、後者は前著第2章）。語り部グループは1999年、クロスロードは2003年（そのベースとなったインタビュー調査を含めて）から、筆者は関与している。よって、前著の刊行時点（2010年）ですでに、それぞれ10年、7年、本書を執筆している2017年時点では、それぞれ20年近く、15年近くにわたって、関連する研究・実践活動を共同当事者として続けていることになる。本書では、この積み重ねを活かして、「永続する運動としてのアクションリサーチ」の重要性とその課題について前著よりも踏み込んだ考察を進めている。

第Ⅱ部の「時間」については、前著には登場しない鍵概念群がポイントである。それは、「時間」ならざる〈時間〉であり、〈過去の未定性〉（「もう」を「まだ」として）であり、〈未来の既定性〉（「まだ」を「もう」として）であり、そして、〈インストルメンタル〉と〈コンサマトリー〉の対比である。本書（特に、第Ⅱ部の各章）では、これら〈括弧〉で表記した〈時間〉（人間の主体的な構えと共にある時間）に関わる鍵概念をベースに、アクションリサーチという社会実践そのものを支え、またそれを新たな形で動かしていくための時間について考えている。これに対して前著で展開した議論の多くは、「括弧」で表記した「時間」の中でアクションリサーチがどの

ような経緯をたどっているかを記述するタイプの議論にとどまっていた。この前著からのステップアップは、破局的な出来事（過去に起こったものであれ、未来に想定されるものであれ）についての語りやふるまいについて扱った本書の第Ⅱ部と前著の第Ⅱ部を対比して読んでいただくと、よく理解いただけるものと思う。

第Ⅲ部の「データ」については、前著ではほとんど触れることができず、本書で新しく取り上げた論点が多い。あえて前著との接点を求めれば、「アクションリサーチで活用される研究方法・ツール・プロダクツ」（前著第1章5節）として論じた点であろう。該当箇所では、筆者は、アクションリサーチを特定の研究方法等と結びつけて考えるのは不適当であり、「永続する運動としてのアクションリサーチ」が展開される長期的な時間プロセスの中で、「複数の方法、ツール、プロダクツをその中に配置することが重要」と指摘している。この指摘は今でも適切だと考えているし本書でもその立場を踏襲している。しかし、このように主張すれば、「では、どのような考え方に依拠して複数の方法を配置すればよいのか」が当然問われることになる。この問いを一刀両断できる回答を与えることは困難だが、本書では一つの試みとして、データの代表性をめぐる二つの対照的なロジック——「平均化」と「極限化」——を援用することで、この難題に対する筆者なりの展望を提示したつもりである。

道案内

三つのキーワード——共同当事者・時間・データ——は、実際には相互に密接に関連し合って、アクションリサーチを特徴づけている。実際、本文中の随所に、他部（他章）の参照を読者に促す記述がある。面倒に思われることもあるかもしれないが、両方の箇所を併読いただくと、より理解が深まるものと思う。とは言え、各章はそれぞれ独立に読んでいただくことができる。よって、興味をもってくださった部分から読み進めていただければ幸いである。ただし、第1章は本書全体のイントロダクションも兼ねており、後続の各章の内容が「予告編」のようにしばしば顔を出す。第1章だけは、この「まえがき」に続けて先にお読みいただくとよいかもしれない。

本書を構成する論考の一部には、ベースとした既刊の原稿があるので、初出一覧として215ページに提示しておく。ただし、各章ともかなり大幅に加

筆し再編している。今般一冊の書物としてまとめるにあたって、書物全体を通貫する論理を明確に呈示するための整理作業を念入りに行った関係もあり、ほとんど原形をとどめないほどに大規模に加除した原稿がほとんどである。よって、既刊の拙稿に目を通してくださった読者におかれても、新しい原稿と思って読んでいただきたいと願っている。

最後になったが、本書の企画・編集・刊行にあたっては、新曜社の森光佑有さんに大変お世話になった。森光さんとは、筆者の研究室で実施してきたアクションリサーチの成果をまとめた著書『現場でつくる減災学：共同実践の五つのフロンティア』でもご厄介になった。今回こうして再び、書物づくりという共同実践のパートナーとなっていたいただいたことに、心から謝意を表す。

目 次

まえがき i

第 I 部 共同当事者

1 ~ 72

第 1 章 アクションリサーチとリサーチ・イン・アクション — 3

- | | |
|-----------------------|----|
| 1 社会实践とリサーチ・イン・アクション | 3 |
| 2 社会实践を「見る」こと | 6 |
| 3 「見る」ことを見ること | 10 |
| 4 共同当事者として「見る」こと | 16 |
| 5 永続する運動としてのアクションリサーチ | 19 |

第 2 章 「個別避難訓練タイムトライアル」 ————— 25

- | | |
|-------------------------------|----|
| 1 「タイムトライアル」が生まれるまで | 25 |
| 2 立ちはだかる「壁」
— 巨大想定がもたらしたもの | 28 |
| 3 「タイムトライアル」以前の集落 | 32 |
| 4 「個別避難訓練タイムトライアル」 | 36 |
| 5 「主体性」の回復 | 42 |

第 3 章 アクションリサーチとしての「アイヒマン実験」—— 57

- | | |
|-------------------------|----|
| 1 実験室実験の古典？ | 57 |
| 2 実験者と被験者 — その生々しいプレゼンス | 58 |
| 3 実験者と被験者との間の深い関係 | 62 |
| 4 実験室の前と後 | 65 |
| 5 「時代の子」 — 「アイヒマン実験」の限界 | 71 |

第4章 アクションリサーチの〈時間〉 ————— 75

- 1 〈時間〉から見たアクションリサーチ 75
- 2 〈時間〉における未定性と既定性 80
- 3 未定性と既定性の逆説的關係 83
- 4 〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉 87
- 5 総括
— 〈時間〉を駆動する二つのダイナミズム 91

第5章 〈Days-Before〉 — 「もう」を「まだ」として ——— 97

- 1 失われた語り 97
- 2 「Days-Before」のサンプル 101
- 3 「Days-Before」がもたらすもの 108
- 4 〈インストゥルメンタル〉と〈コンサマトリー〉
の交絡 114
- 5 アクションリサーチとしての〈Days-Before〉 120

第6章 〈Days-After〉 — 「まだ」を「もう」として ——— 123

- 1 「明日になればすでに起きたことになる」 123
- 2 元凶としてのリスク論 128
- 3 「賢明な破局論」への疑問と応答 (1)
— 「リスク論」でも「運命論」でもない 132
- 4 「賢明な破局論」への疑問と応答 (2)
— 「予定説」との親和性 136
- 5 〈コンサマトリー〉な価値 139
- 6 アクションリサーチへ 143

第7章 データ・イン・アクション — 実証を超えて ——— 149

- 1 データ・イン・アクション 149
- 2 質的なデータと量的なデータ 150
- 3 三つのタイプのデータ 155

4	コ・プロデュースのデータ	161
5	「オープンサイエンス」	169
6	再び、データ・イン・アクション — ビッグデータの役割	173

第8章 量的データの質的分析 ————— 175

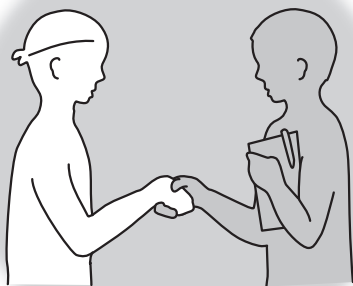
1	質的アプローチ／量的アプローチ	175
2	回答に込められた実存的意味	181
3	質問紙調査における潜在的コミュニケーション	186
4	データ・イン・アクションとしての質・量融合	197

第9章 河田恵昭教授の災害リスク・コミュニケーション — 201

1	言っていることと実際になしていること	201
2	人間化された自然	202
3	現在化された想定	206
4	極限化された数値	209
5	「特殊性・固有性」対「普遍性・一般性」	212

初出一覧	215
引用文献	216
人名索引	225
事項索引	227

第I部 共同当事者



第1章 アクションリサーチと リサーチ・イン・アクション

1 社会実践とリサーチ・イン・アクション

1-1 「共にコトをなす」

社会実践とは、簡単に言えば、人びとが共にコトをなすということである。私たちが暮らすこの社会では、ビジネスの現場、まちづくりの現場、教育の現場、福祉の現場、司法の現場、防災の現場など、いろいろな現場で、日々、多くのコトが多様な人びとによって共になされている。むろん、主に研究者によってなされる研究活動もそれ自体、共になされるコトの一つ、つまり、社会実践の一つである。

さまざまな社会実践の現場に研究者（研究という名の社会実践）が関わることになるきっかけには、いくつかのパターンがある。偶然の出会いもある。コトがうまく運ばないため現場の変革に向けて、現場の当事者から研究者に関与の依頼がなされる場合もある。望ましいことではないが、現場の当事者があずかり知らぬ研究者の勝手な都合や希望から関与が始まる場合もある。もちろん、その場合でも、結果オーライになるケースも存在する。実際には、これらを含めいくつかの機縁や事情が複合している場合が多い。

ここで、単純だがしばしば見過ごされがちな次の事実を銘記しておく必要がある。それは、現場ですでに進行中の社会実践に研究活動という別の社会実践がもち込まれる必然性は、さしあたってまったくないという事実である。仮に当該の社会実践が何か不都合を抱えているとしても、当事者たちが自らの知恵とわざを通じて問題を解決するケースが、実際には多いだろう。研究者以外の人びと、たとえば、行政の関係者やボランティアが手助けのためにその実践に介入することもあろう。さらに、仮に目下の課題がより重大な場

合、たとえば、ジャーナリズム（マスメディア）がそれを取り上げたり、問題解決が司法の手に委ねられたり、研究以外の社会実践と結びつく場合のほうが圧倒的に多いに違いない。

1-2 「アクションリサーチなど頼んだ覚えはない」

本章の記述自体がまさにそうであるが、研究者が「社会実践」と大上段に構えるとき、それに対する研究者の研究活動という形式での意図的かつ積極的な関わりや介入——すなわち、アクションリサーチ（という社会実践を行うこと）——が自明の前提になっていることが多い。しかし、実際には、常にそうした関わり（アクションリサーチ）が期待されているわけでも求められているわけでもない。当該の社会実践の側から見たとき、そこに研究活動という名の社会実践が介入してくるという事態は、むしろ例外的なケースであるとの冷静な認識が、まずは研究者の側に求められる。

このことの意味を直感するために、研究者が、自分のプライベートな生活や自分自身の研究活動に、他の研究者による別の研究実践が関与（介入）してくるケースを想定してみるとよいかもしれない。実際、そのような事例もある。グリーンウッドとレヴィン（2006/2000）の「アクションリサーチによる大学と社会の関係の再構築」と題された論考がそれである。これは、大学や学界における研究活動（特に社会科学の研究活動）という社会実践のベターメントをめざした研究者の介入（アクションリサーチ）を素材にして、アクションリサーチについて論じるというユニークで優れた論考である。つまり、ここでは、まさに研究という社会実践そのものが、グリーンウッドらによる別の研究によって介入されているわけである。

しかし、これはあくまでも例外的なケースで、おそらく、筆者を含め多くの研究者には、そのような体験はほとんどないのではないか。むしろ、そのような事態に対しては強い違和感をもつのではないだろうか——「どうして、私の研究（あるいは、生活）が研究されねばならんのだ」、「アクションリサーチなど頼んだ覚えはない」と。そうした強い違和感をもたらしうな社会実践（つまり、研究という実践）を通して、自分たちアクションリサーチャーは他の社会実践に関わろうとしているとの自覚が、まずはスタートラインとして据えられるべきであろう。

したがって、アクションリサーチでは、どのような研究方法が適切か、質的なデータあるいは量的なデータのどちらが有効か、などといった事がらについて議論したり検討したりする前に、まず、研究者が研究を通してある社会実践に関与するという、このきわめて例外的な形式をもつ社会実践が、もとの社会実践のベターメント（杉万，2007）に対してプラスに作用するのかどうかについて、研究者は当事者とともに常に慎重にモニタリングする必要がある。むろん、プラスかマイナスかが天下りの決定されているわけではない。そのこと自体を、研究者と当事者とが展開する長期にわたる共同実践（4、5節参照）を通して常に問い続け、折に触れて自省し続けるほかない。

1-3 リサーチ・イン・アクション

「実践の現場では、アクションリサーチならぬ、リサーチ・イン・アクションである」と説いた杉万（2007）の印象的な言葉を借りれば、ここまで述べてきたことは次のように言い換えることができる。研究という名の社会実践を別の社会実践にもち込むことは、アクションリサーチである以前に、常にリサーチ・イン・アクションである、と。つまり、アクションリサーチとは、すでに進行中の実践（アクション）の中（イン）に、研究（リサーチ）という異物を侵入させることなのだ。

よって、以下のようなポイントについて、研究者（および現場の当事者）は、常に、また十分モニタリングすべきである。すなわち、当該のアクションリサーチが、リサーチが介入する前のもとの社会実践の当事者によって真に要請されているのか。アクションリサーチによってベターメントを図るという構図そのものに問題がはさまれているのか（宮本，2016）。あるいは、ボランティア・イン・アクションやジャーナリズム・イン・アクションといった、他の「××・イン・アクション」と比較したとき、アクションリサーチは、より望ましいベターメントをもたらすのか。このようなチェックポイントである。

しかも、一口に当事者と言っても一枚岩でないことも多い。ある人は研究者との共同実践による問題解決に期待を寄せている一方で、それを望んでいない人もいるというケースも当然ある。いずれにしても、上記の意味でのモニタリングの結果、総合的に考えて「否」と判断すれば、その社会実践に対

する研究を通した関与（アクションリサーチ）は、当然、見直されたり停止されたりすべきである。アクションリサーチには、アクションリサーチ自体に対するリフレクティヴ（再帰的、自省の）な見直しの営みが不可欠なのだ。

別言すれば、アクションリサーチは、究極的には、（当初）介入する側に立っていた研究者自身や当該のアクションリサーチ自体の問い直し、すなわち、アクションリサーチ自体のベターメント — 当初介入の対象となっていた社会実践のベターメントだけではなく — に結びつかざるを得ない。なぜなら、常に自らが要請されているのか、また有効であるのかと問い続ける必要があるからである。前著の問題意識の継承であり、また本書にとって重要な意味をもつこの事実は、見る（観察する）ことと見られる（観察される）ことの関係について論じた本章2節、津波避難に関する筆者自身の取り組みについて紹介した第2章、ミルグラムの服従実験の意味について論じた第3章、アクションリサーチにおけるデータの意味や役割について論じた第7章など、本書の随所で形を変えて反復されることになる。

2 社会実践を「見る」こと

2-1 第三者として見ることは可能か

1節で述べたモニタリング作業を経て、ともかくも、学校現場における教育活動であれ、地域社会における防災活動であれ、何らかの社会実践に対して研究という外来の社会実践が関与する状態 — アクションリサーチ — が実現しているとしよう。その場合、アクションリサーチにとって、まずは対象となっている社会実践をよく「見る」こと、つまり、社会実践に関する現状把握が最も重要な事項となる。この点については、研究としての関与も、行政としての関与やボランティアとしての関与など他の場合と、何ら変わらない。

他方で、社会実践をよく「見る」ために、研究者が独自の手法・ツールを磨いてきたことも、また事実である。伝統的には、研究者はそれらの手法・ツールを駆使して「データ」（第Ⅲ部のメインテーマ）を入手し、現場の当事者が（まだ）見ていないことを、第三者として見ることによって現場のベ

ターメントに貢献することを得意技としてきたと言ってよい。たとえば、当該の社会実践の現場にすでに流通している言語情報をデータとして独自に解析すること（言説分析）、質問紙調査など研究者が意図的に設定した媒体を通して当事者から得たデータを解析すること、あるいは、そうしたデータをもとに現場の未来の状況をシミュレーションすることなど、さまざまな手法・ツールを通じて研究者は現場を――当事者とは別様に――見ようとする。さらに、研究者は、見るための最大かつ最強の武器でもあり、かつ、ときに大きな障害にもなりうる「理論」という道具ももっている。

ただし、第三者として見るという表現、言い換えれば、当事者（現場の人びと）の見えと第三者（研究者）の見えとを対比させることについては、ていねいな考察が必要とされる。たとえば、第三者（研究者）は、常に、当事者よりも多く、また正確に社会実践を見ているのだろうか。むしろ逆に、もともと社会実践の内部にいる当事者こそが、それをより正確に見ているとの考えも十分説得的ではないか。あるいは、そもそも、研究者が常に第三者で、現場の人びとが常に当事者なのか。さらに、当事者／第三者（当事者の見え／第三者の見え）という二項図式は、あまりに単純ではないか。

アクションリサーチの最初の第一歩とも言うべき「見る」ことにおいて、すでに、これらの厄介な、しかし重要な課題が生じてしまうのは、人間や社会を対象とした研究においては、研究者が社会実践について見るための社会実践（研究活動）もともと社会実践とを完全に分離できないという制約が存在するからである。言い換えれば、前者が後者に与える影響、また後者が前者に与える影響を完全には消去できないという制約があるからである。この点は前著（矢守、2010）でも指摘した。

杉万（2013）は、この制約のもとで展開される科学を人間科学と呼ぶ。その上で、「人間科学」を、研究対象（もともと社会実践の当事者）と研究者を一線で画し、一線の向こう側に据えた研究対象のあるがままの姿を一線のこちら側から「見る」という研究スタンスを完璧にとることができる（と想定する）「自然科学」とを対照させる。アクションリサーチは、もちろん「人間科学」の一種であるが、それだけでなく、上述の制約が特に明瞭だという意味で「人間科学」の特徴がとりわけ濃厚な研究活動だと位置づけることができる。もっとも、この後2-2項で見ると、この制約が独自の魅力と強みをアクションリサーチにもたらすことも重要である。